

令和4年度 第1回竹原市総合教育会議

- 1 日 時 令和4年9月1日（木） 午後2時
- 2 場 所 市役所 3階 委員会室
- 3 出席構成員 今榮市長，高田教育長，浅野教育長職務代理者，有田教育委員，竹下教育委員，西川教育委員，平田教育委員
- 4 説 明 員 新谷副市長，平田総務企画部長，沖本教育次長兼総務学事課長，富本教育委員会参事，三上企画政策課長，大橋教育指導担当課長，堀川文化生涯学習課長，中川事業調整監
- 5 協議事項 市立学校適正配置の推進について
- 6 その他 竹原市海外派遣研修について

○事務局 それでは、ただいまから令和4年度第1回竹原市総合教育会議を開催いたします。初めに、開催にあたりまして今榮市長から挨拶をお願いいたします。

○市長 お忙しい中の総合教育会議にお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、平素は皆様には教育行政はもちろんのこと、竹原市の市政全般にわたりましてご理解、ご協力、ご支援を賜っておりますこと、改めて感謝申し上げます。

竹原市におきましては、急速な少子・高齢化と本格的な人口減少が進む中で、持続可能な都市となるよう、第6次竹原市総合計画において将来都市像を「元気と笑顔が織り成す暮らし誇らし、竹原市。」と掲げ、誰もが住みやすいと一貫して誇らしく思える町を目指して各種施策の推進を図っているところであります。

とりわけ学校教育に係る施策の方向性につきましては、「夢を持ち、多様な人々と協働し、社会を主体的に生き抜くことができる人材を育成している」ことを目指す姿といたしまして、地域と共にある、信頼される学校づくりの推進、幼・保・小連携教育の推進、充実した教育環境づくりなど、子供たちが夢の実現に向け挑戦できる環境を確保するよう取り組んでおります。

本日の会議では、市立学校適正配置の推進、そして今年度実施した竹原市海外派遣研修について説明をさせていただきたいと存じます。

皆様におかれましては、闊達な意見交換により教育に関する方向性を共有いたしまし

て、より一層の連携強化を図ることで竹原市の教育行政のさらなる充実につなげてまいりたいと考えております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局 続きまして、高田教育長からご挨拶をお願いいたします。

○教育長 失礼をいたします。教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

今榮市長におかれましては、日頃から本市の教育行政の推進に深くご理解をいただき、委員一同厚くお礼を申し上げます。

まずもって、新規事業でありました海外派遣研修におきまして、現地での生徒の活動及びホノウリウリ・ミドルスクールとの連携協定締結という目的を達成することができましたことは、市長の圧倒的なご支援によるものと感謝をしております。今後は、交流等に基づく成果が刻み続けられていくように取組を進めてまいりたいと考えております。

さて、市立学校におきましては、新型コロナウイルス感染症の影響によりまして、臨時休業の学校もこれまでございましたが、これまでの教職員の知恵や、あるいは取り組んできた教訓を生かしまして、教職員と子供たちが行事等の内容や方法を主体的に考え、言わば学びを止めない教育活動を推進しているところでございます。

また、この後協議をいただきますが、市立学校の適正配置等につきましては、学校運営協議会を中核とした義務教育学校を設立し、地域に根差した9年間の系統性ある小中一貫の教育や、地域の教育力を生かした特色ある教育を行うことが必要であるという竹原市立適正配置懇話会の答申を踏まえながら、現在、市立学校の適正配置計画の策定に鋭意取り組んでいるところでございます。

ところで、市内全ての学校に学校運営協議会を設置いたしまして、コミュニティ・スクールとして2年目を迎えております。地域と共にある信頼される学校づくりを推進していくために、市民の皆様に向けた積極的な情報発信を通して、周知、理解を図るとともに、学校運営協議会制度の質的向上を図りまして、学校にとっても、地域にとっても魅力ある持続可能な制度となるよう進化させていきたいと皆で決意をしているところでございます。

そして、今年度新たに竹原市幼保小連携推進協議会を立ち上げまして、社会福祉課と連

携し、認定こども園等から小学校及び義務教育学校への円滑な接続を意識した取組を計画的に行っているところでございます。今後も子供たちに育みたい資質・能力を共有しながら、幼・保・小連携・接続の在り方についての取組の推進を図ってまいります。

続いて、生涯学習の分野におきましては、社会教育及び生涯学習の施策や主な内容を関連させまして、系統的に取り組むため、「竹原市社会教育・生涯学習推進ビジョン」を策定いたしました。これにより社会教育関係機関と連携して様々な施策を推進しているところでございます。

竹原市立書院図書館は株式会社図書館流通センターによる指定管理を行っているわけでございますが、昨年度は、電子図書体験会や児童文学作家の講演会といった新たな事業を展開もしているところでございます。

最後に、歴史・文化財につきましては、保存の面では、旧森川家住宅の修理のための耐震基礎診断や実施設計を進めております。また、活用の面では、重伝建選定40周年記念事業や歴史的建造物の社会実験など、多様な取組を展開しているところでございます。こういったことや日本遺産の持つコンテンツとも併せまして、市民の各年代にわたって「ふるさとたけはら」への誇りや愛着が涵養されていくことを照射しながら取り組むことが大切であると考えておるところでございます。

今後におきましても、市町と教育委員会とが十分な意思疎通を図り、学校、地域、保護者が一体となった教育を進めていき、子供たちの学びの充実はもちろんのこと、皆様が竹原に愛着と誇りを持っていただいて、どの世代もがつながり、生涯にわたって学ぶ意欲を持つことができる教育環境のさらなる充実を図りたいと考えておりますので、引き続き格別のご理解とご協力をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。それでは、ここからの進行はこの会議の議長である市長にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○市長 それでは、規定によりまして、私が進行させていただきます。円滑な運営に皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが、協議事項に移ります。配布している次第にありますとおり、本日の協議事項は、市立学校適正配置の推進についてとなっております。

それでは、事務局のほうから説明をお願いします。

○教育次長 それでは、私のほうから時間をいただきまして、ご説明をさせていただこうと思います。

この協議事項については、市立学校適正配置の推進についてとなっておりますが、今榮市長におかれましても、教育委員の皆様におかれましても、この市立学校の適正配置に関する取組につきましては、一定の現状認識はされていると、そのように思っております。しかしながら、本日の議論のきっかけとしていただくということで、こちらのお手元にあります資料１を使いまして、竹原市立学校適正配置懇話会の行った諮問とその答申について、その答申に基づいて現在策定中の適正配置計画について、ご説明をさせていただこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、資料１の１ページ目をご覧ください。

まず、竹原市立学校適正配置懇話会でございます。こちらの懇話会につきましては、学識経験者、学校、地域の関係者など、１４名の委員の方で構成されております。竹原市立学校適正配置懇話会設置要綱の第２条に、任務ということで定められている内容、そちらに記載しております。懇話会は竹原市教育委員会の諮問に応じ、小・中学校等の適正配置について審議し、その結果を教育委員会に答申するというものでございます。

それでは、２ページ目をご覧ください。

その竹原市立学校適正配置懇話会の開催の状況でございます。第１回目を令和３年２月５日に開催いたしました。教育長のほうから、懇話会の会長へ諮問書を手渡すという形で諮問を行っております。諮問事項につきましては、そちらに示しているとおり、

１点目が市立学校の適正配置及びブロック制の再編について。

２点目が市立学校の統合・再編について。

３点目が市立学校の統合・再編の時期について。

４点目が、小学校、義務教育学校全期課程学校選択制の導入の是非についてということでございます。

諮問理由につきましては、少子化の進展に伴って、児童・生徒数が減少し、学校を取り巻く状況は厳しさを増している。こうした状況の中、児童・生徒の社会性の育成に制約が生じるなど、教育指導上の課題が多くあるということでございます。

３ページ目をご覧ください。

学校訪問を含め６回の会議を行いまして、第７回目が最終の会議となっております。開

催した日が令和4年2月4日ということで、その日に答申を受けております。受けました答申の内容につきましては、市立学校の現状と課題、その内訳としては、児童・生徒数の減少、小規模校の課題、学校施設の老朽化など、そういった課題と学習指導要領の目指すもの、教育大綱など、近未来の竹原市教育が目指す方向性、それと保護者アンケートの結果、推進している地域力を生かすコミュニティ・スクール、それらを踏まえて最終的に結論づけをいただいております。その結論づけをいただいた内容につきましては、竹原市らしい学校運営協議会を中核とする義務教育学校へと段階的に統合、再編していき、地域に根差した9年間の系統性のある小中一貫の教育と、それぞれの地域の教育力を生かした特色のある教育等を推進し、竹原市の児童・生徒の力を最大限に引き出す学校教育の実現を図ることが必要であると。また、こうした推進する方向性と学校選択制は相入れないと、そういった結論づけをしていただいております。

4ページ目をご覧ください。

こうした答申に基づきまして、今後、20年を見通す中で、市立学校の適正規模及び適正配置の具体的なビジョンといたしまして、計画期間を5年間、令和5年度から令和9年度の5年間とする適正配置計画、現在策定中ですので、案ということをつけさせていただいておりますが、それを策定しているところでございます。

その骨子の内容でございますが、竹原市立学校の現状と課題ということで、児童・生徒数の現状と将来推計、小規模校の課題、学校施設の老朽化、保護者のアンケートの結果、そういった現状と課題と、竹原市が目指す教育の方向性である学習指導要領等が目指す資質、能力と学び、竹原市教育大綱、あと将来の教育の方向性ということ。

それと、3点目のコミュニティ・スクールを中核とする義務教育学校の設立で、最終的な具体的な統合、再編のイメージを示しているという内容となっております。

この内容も答申と似たような骨子となっておりますが、答申の焼き直しと受け止められないように、市の意思を明確に示したものとなるよう整理を進めているところでございます。

続きまして、5ページ目をご覧ください。

この骨子の内容の具体的な内容でございます。竹原市立学校の現状と課題の1点目、児童・生徒数の現状と将来推計でございます。平成14年度に小学校1年生から中学校3年生まで9学年で2,644人おりました。それが令和4年度では、1,300人と平成14年の約半分となっております。これから18年後の令和22年度には669人という形

で見込んでおり、この669人といえば、令和4年度の1,300人の約半分。つまり、平成14年度の約4分の1というような状況が見込まれております。

続きまして、6ページ目をご覧ください。

小規模校の課題でございます。大きく分けて2点整理しております。まず、学習環境上の課題といたしましては、人間関係や相互評価等が固定化される、学級間での競争など、切磋琢磨する機会が減る。様々なコミュニケーションを体験して、多様な考え方に触れることや、運動会や文化祭、修学旅行などの集団活動や学校行事に制約が生じるなどがございます。

次の学校運営上の課題につきましては、経験年数、専門性、男女比等バランスの取れた教員配置が難しい、各教員が多様でより多くの業務を担うことで負担が増える、教科担任制の維持が困難などが考えられます。

続きまして、7ページ目をご覧ください。

竹原市立学校の現状、課題の3点目ということで、学校施設の老朽化ということがあります。仁賀小学校を除きます10校が築30年以上経過しており、予防保全を効果的にを行い、長寿化を図る必要がある、そういった状況にあります。

4点目の保護者アンケートの結果でございます。質問数は26項目ございました。回答世帯数は875世帯。配布世帯904世帯で、回収率は約96.8%ということです。

回答者の主な属性といたしましては、女性が87%、30代、40代が87.9%という状況でございます。

8ページをご覧ください。

保護者アンケートの具体的な結果の内容です。コミュニケーション能力や自分の意見を表現する力、協調性、柔軟性、多様性に対する適応力などの資質、能力を多様な人間関係の中で学び合い、高め合う学習、協働的な学びを通して身につけさせたい。人数の多い学校、これはクラス替えができるような、そういった学校を指しておりますが、そのデメリットと、人数が少ない学校、これは1学年1学級、または複式学級を指しておりますが、そういった学校のメリットから子供の課題に気づき、きめ細やかな指導、個別指導を期待している。

3点目としましては、学校における適正規模はクラス替えができる規模。1学級20人台を望んでいる、そういった結果となっております。

9ページ目をご覧ください。

竹原市が目指す教育の方向性でございます。大きく2点でございます。

まず、1点目といたしましては、学習指導要領等が目指す資質、能力と学びということで、全ての子供によりよい未来社会と人生を切り開く資質、能力を育てるカリキュラムを学校と地域社会等とがよく連携、協力して実現すること。事業改善の要として、一人一人の子供に応じた指導である個別最適な学びと、集団の中で埋没させない指導である協働的な学びを一体的に行い、主体的・対話的で深い学びを実現すること。

それと、竹原市教育大綱に定められている内容といたしましては、目指す子供像を、夢を持ち、多様な人々と協働し、社会を主体的に生き抜くことができる人材とし、竹原をふるさととして大切にすることが醸成されるよう、学校、家庭、地域の関係者が連携、協働し、教育力を向上させるとしております。

続きまして、10ページでございます。

3点目の将来の教育の方向性としていたしましては、国際情勢、社会経済情勢や社会構造がより大きく変化することが見込まれますが、どのような社会に変化したとしても、子供たちがその変化に対応して、主体的に生き抜くために必要な実践的な資質、能力を身につけていくことがさらに重要となると考えております。そして、多くの保護者は、一定規模の集団の中で、きめ細やかな個別の指導をすることや、協働的な学びを通して多様な学力の向上を図ることを期待しております。

こうしたことから、この四角囲みでございますが、一人一人の子供たちが一定規模の集団の中でそれぞれの資質、能力を十分に発揮し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の作り手となるよう教育を展開する。これが一つの方向性と考えております。

続きまして、11ページでございます。

コミュニティ・スクールを中核とする義務教育学校の設立ということで、これまでの取組といたしまして、義務教育9年間をひとまとまりの期間と捉え、児童・生徒の発達段階に応じた教育活動を推進してきました。特に吉名学園と忠海学園の2校の義務教育学校において、9年間を見通したカリキュラムの作成を行うことで、地域と共同、連携した新たな教育活動を創出してきた。地域交流センターや地域団体や学校と協働した取組を積極的に行い、全ての学校で地域と深くつながる学習活動を展開していくことで、この四角囲みで囲っている方向性を一つ考えていきます。

コミュニティ・スクールを中核とする一定規模の義務教育学校を設立することにより、

地域に根差した9年間の系統性のある小中一貫教育や地域の教育力を生かした特色のある教育を推進する。この四角囲みで囲んだところが、2つが大きな方向性と考えております。

それで、12ページでございます。

具体的な統合、再編のイメージです。ブロックとして4ブロック、これは各中学校、義務教育学校の4つのブロックに分けております。忠海ブロックにおきましては、忠海学園がございまして、計画期間における統合、再編につきましては現状どおりとなります。吉名ブロックにつきましても、同様でございます。賀茂川につきましては、現状、東野小学校と荘野小学校、仁賀小学校、賀茂川中学校、4校ございますが、令和7年度には4校を統合し、義務教育学校を設立する。竹原ブロックにおきましては、現在、大乘小学校、竹原小学校、中通小学校、竹原西小学校、竹原中学校と5校ございますが、そのうち大乘小学校を令和8年度には竹原小学校に統合するというようなデザインを示そうと考えております。

最後のページでございます。具体的な統合、再編ということで、統合、再編の取組を整備しております。

通学方法は、原則として徒歩または自転車とするが、通学距離が小学校4キロ、中学校6キロを超える場合は、路線バスやスクールタクシー等の通学支援を実施する。それと、旧学校の学校運営協議会を閉校後も進学校の学校運営協議会の部会として存続させ、互いに連携・協働することにより、これまで培ってきた地域活動や地域行事の存続・発展や地域課題の解決を図ることにより、閉校した地区の子供たちや地域住民のシビックプライドの醸成を図ることを計画に書いていこうと考えております。

それでは、私の説明は以上とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○市長 説明が終わりまして、この間、冒頭教育次長が話したように、この件については、皆さん、一定に承知をされているというふうに認識をしておりますけれども、本日の総合教育会議の中で、この案件に関して委員の皆様のご意見等をいただければと思います。よろしくお願いいたします。いかがでしょうか。

○平田委員 はい。

○市長 はい、どうぞ。

○平田委員 本日の協議事項で市立学校適正配置の推進ということでしたので、こちらの今日お渡しいただいた資料ではなく、私はこの教育委員会で配られた竹原市の学校適正配置計画のより詳しいほうを読んできたのですが、失礼しました。まず、この計画を初めて見たとき、すごく衝撃を受けました。最終的に令和24年度、竹原市一つの学校になる。竹原学園、竹原市が1つ、竹原市で小・中学校が1つというのを聞いて、本当にびっくりして、正直、現状は十分理解していますが、竹原って本当にあるのかなというふうな気持ちぐらい覚えました。しかし、現実はこのように推計がされていますので、受け止めなければいけないですが、7月の中旬ぐらいに、見られた方も多いと思いますが、中国新聞の1面に小・中学生の人数が激減していると掲載されていたと思います。過去10年間で中国地方の市町村別で町村を除いた場合の減少率の1位が岡山の備前市で35%、2位が34%で竹原市というデータを見て、現実を改めてこうだということを感じました。

それで、こういう計画は現状を理解しないといけないのですが、逆に、竹原市の将来がこうあってほしくないなという気持ちもすごくあります。もっと夢がある町になってほしいですし、小・中学生の子供たちが増えるような、人口が増えるような竹原市になってほしいなというのを希望しております。以上です。

○市長 今のご意見に対して、確かに、現状と本市としての思いというものは、大義が当然あります。そうありながら、特に教育ということに関して言えば、当事者である子供たちがどうなのか、子供たちが一番よりよい形として最終的に大人が判断していかなければいけないというふうに認識をしております。その中で影響のある地域であるとか、幅広い年代層の方がどうお感じになられるかということも、無視できないというふうに認識しておりますので、教育に関してあるべき姿の追求ということは推し進めなければいけないですし、一方で、今、平田委員がおっしゃったようなまちづくりとしての取組については、同時並行的に対策を講じていかなければいけない。

その中で、竹原市の全体の方向性としては、総合計画を定めながら、前期、後期のそれぞれ5年間の計画を目標として定め、様々な施策を推進していくことによって、例えば人口減少の問題であるとか、様々な福祉、防災、基盤整備を含めた総合的な政策を推進していくことによって、いろいろな課題解決を導くということになります。

人口減少問題に関しては、ご承知のように、減少というものを抑止するというのは非常に難しい課題です。そういった中、小さくなっている出生人口に対し、労働世代がいかに竹原市に住んでいただくような取組をするか、さらには、一旦竹原から出ていった若者に帰ってきていただく環境をいかに作っていくかといった取組を併せてやっていくことが我々、行政が担っている、また、地域経済界が担っている責任だというふうに思っています。

懸念されることは重々承知の上で、しっかり総合的に対策を講じていかなければならないという認識を強く持っておりますので、その点をご理解いただきながら、まずは教育行政をいかに推進するかということについて、様々なご意見をいただければと思います。

副市長、何かありますか。

○副市長 今、市長のからお話があったとおり、一つは、子どもを増やしていくということは、現実的に非常に難しいかとは思いますが、現時点で年間大体100人ぐらいの出生があります。コロナ禍になり大きな変化はありませんが、昨年度までは、月に2桁ぐらい生まれた月がありましたが、今年度に入ってはそれがなく、年間で最終的に100人を大きく下回る可能性もあると感じており、できれば年間で100人以上の人数は、確保していける形を取っていければというように思っております。

その際に、先ほど市長からもありましたように、企業誘致などを含めて働く場を確保していくというところが、竹原市に子どもが定着していただいたり、あるいは帰ってきていただいたりということにつながるため、そういった環境の確保に努めていきたいということが一点と、10年、20年前と比較して、晩婚化に伴い結婚率が低くなっているという実態がございます。

晩婚化が影響し、子どもの数も少なくなるとことも考えられますので、できるだけ若いうちに結婚いただき、ネウボラなどの子育て支援は竹原市も他市町と比べ、遜色ないと思っておりますので、出生数が増加するよう、まずは結婚のための取組というものを、具体的にはなっておりませんが、検討を進めていけないと思っております。

○市長 ありがとうございます。平田委員、いかがですか。

○平田委員 若い世代が帰ってこられても、近隣の本郷に家を買われたと最近よく聞いて

います。市外に住居を選ばれるという、都市間競争に負けていることに、すごくもどかしさを感じています。せっかく本郷まで帰ってくるのであれば、竹原に帰ってくればいいのにとよく感じています。以上です。

○市長 いろんなお耳にする状況ですと、一方で竹原にぜひ帰ってきたいとか、移住を決められた方とかというのは、実は皆様の情報に入っていない現状もございます。ですから、その辺のところも、町に誇りを持つということがまず非常に大事なことだと思いますので、憂うばかりではなく、いいところもたくさんあるというふうな思いを持って、竹原のことをさらに発信をしていく、また呼び戻していく原動力となる皆さんのようなパワーも必要でありますので、ぜひ、そういうことも総合的に取り組んでいかなければならないと思っております。ご理解いただければと思います。その他、ありましたらご自由にどうぞ。

○西川委員 はい。

○市長 はい、どうぞ。

○西川委員 適正配置については、本当に1年間という短期間で、その地域の方の思いと保護者の方の思いをしっかりと酌み取っていただいて、スピード感を持っていい案を出していただいたなというふうに感謝します。

1点お願いがあり12ページですが、この答申に出していただいたプランの中で、子供たちが切磋琢磨していく中で、持続可能な社会の担い手として子供たちが、日本や世界とつながって生きていく、生きると思うのですが、その中で切磋琢磨するには、適正な人数とクラス替えなどの切磋琢磨できる環境を整えていただく中で、12ページの賀茂川と竹原の学区ができた際、恐らく東野と荘野と仁賀と大乘小が廃校になるため、同時進行で、今、旧忠海東でやっていたいる形で後手にならないように、廃校になる施設を有効活用することも併せて行政のほうでお願いしたいということが一点。

また、教育委員会さんが色々な仕掛けをされて、いろんな取組をされてる中、アンケートで自己有用感とか、郷土に対する思いとか、地域に対する思いが平均より高く、それは本当に先生方や教育委員会を中心とした取組が生きている結果なのですが、ただ、それと

は逆行する傾向が、竹原高校と忠海高校の倍率、皆さん、ご存じですか。

募集倍率ですが、令和3年、竹原高校の普通科で選抜2が0.41、去年が0.64、忠海高校が定員、普通科80名に対して、竹原高校は普通科40名ですが、忠海高校が80名に対して令和3年が0.49、去年が0.36です。普通科120名の定員に対して、ここ2年間で60くらいしか集めていません。それが何を意味するかというと、生徒、保護者の中に勉強しなくても地元の公立高校へ行けるという意識があるのです。そうすると、今、先生方が頑張っておられる取組と逆行する傾向がそこに発生しています。

それで、去年申し上げたように、忠海、そうなる、これは全体的なことではあるのですが定員がもうあってなのです。特に急激な倍率の低下がこの2校で起こっており、本郷工業さんは、本業という名前を捨てられて、総合技術になりましたように、これは県が主体でやったのか、知事からの何か打診があったのか、存じ上げないのですが、何か竹原のほうから県教委にアクションを起こせばという思いがあり、その思いが強くなったのが、この答申が出たときに、平田委員が言われたように、竹原学園で一つになろうということなのです。

もし、高校が竹原になくなって、忠海のほうが若干レベルが高いことから、忠海が残ったとすると、竹原学園があるのだけど、高校は竹原の中じゃなくて、忠海のほうにあるということがもし起きたとすると、忠海高校が残ってはいけないということではなく、竹原高校、忠海高校、どちらでもよいのですが、そういう地理的なことも起こってきたりするので、何か先手、先手を打てていければ、今、小・中学校で取組されてる課題解決型だったり、地域の方と相まって、伝統も重んじながら、それに加えてグローバル化の取組をされてますので、それらと相まって子供たちが勉強しなくても行ける学校ではなく、行きたいと思う学校があって、そこに競争の原理が働いて、努力をして地元の公立高校に行こうというふうな意識が芽生えるような形があればいいなということを意見として申し上げたいです。以上です。

○市長 はい、ありがとうございます。

今、2点あって、いわゆる統廃合後の、今までもあった課題ではありますけれども、いわゆる教育施設の利活用の件について、何か部長コメントを。

○平田総務企画部長 総務企画部長の平田です。よろしくお願いします。

お話がございました、以前もあったと思いますが、旧忠海小学校の後地、リングローさんという業者さんが入られて、パソコンや高齢者の方のスマホの対応などを行っております。先ほど平田委員のほうからも、恐らく雇用のなどもあると思いますが、地元の方の雇用や、リングローさん、東京が本社ですが本社のほうの方からも、こちらへ住まわれて従事されています。あと、忠海の旧の西小と吉名、今、12ページでお話ございました北部の4校と大乘小学校ということになりますと、やはり今後の施設の活用というのは大変重要でございますので、それ以前に、小梨と田万里も閉校になっておりますが、それぞれ地域の方としても、私も出身が田万里でございますので、地元の方、廃校という言葉必ず使われずに閉校という言葉で常に言われておりまして、そういった閉校された施設の有効活用を事業者の方も注目される場合もありますし、そういった面でも我々も情報提供しながら、当然地域の方とも十分お話ししながら、後施設の活用というのを鋭意取り組んでまいりたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○市長 今、吉名、忠海西小学校の件も、実はなかなか成就するまでには公表には至らないですけども、いろんな検討や動きもありますので、そういったことを新たに閉校する学校においても、取組をしていく必要があるというのは、当然のことながら、行政として認識しなければいけないことですので、いろんな現状もありますけれども、様々な働きかけをしながら、その手続は取組まなければいけないというような思いがあります。この手続は本当にいろんな行政改革をする上においては、必ず切っても切れない関係にあるものですから、スクラップ・アンド・ビルドのビルドのほうに向けて取組を進めていきたいというのは認識をしております。

県立学校の話をつなぐ事務局のほうで話しするのは難しいと思うので、西川委員のほうからも、意見という話もありましたけれども、やはり現実問題として、義務教育のこれだけのデザインを考えていく中で、切っても切り離せない県立の2校の問題だというふうに思っております。

今、様々な懇話会でいろんな協議をする前提で答申いただいて、今年度計画を策定していくわけですけども、県立の場合も、やはり同じように議論がなされないといけない。これは県で全てというより地元としてもいろんな思いを伝え、またいろんな検討協議をし、という場面は必要かと思っており、かつ、それぞれの義務教育の学校の中にも学校運営協議会というのはありますし、高校も今は学校運営協議会があって、市教委のほうからも参

画をさせていただいたりしていますが、やはりそれを独自にずっとやっても、なかなかこの議論には接点が見いだしにくいということで、やはり行政のほうからも、この行き先の義務教育と併せて、県立もいよいよ取組を進めていかなければいけないというふうな認識は、私個人的には持っています。こういった時期になると必ず、例えば上下高校ですかね、上下高校であるとか、先般、新聞にも出ていましたが、いろんな地域で協議会を立ち上げるというような動きがありますよね。あれは、いわゆる竹原市内の県立高校2校よりももっと状況としては進んでいる状況の中で、ぎりぎりで協議が始まっているという認識があり、そうならないためにも、先行きのことは今から遅れることなく取り組まなければいけない。それがやはり竹原のためであり、竹原の子供のためにもなるんだと思っていますので、ぜひその辺は教育委員の皆さんにもいろいろと意見をいただきながら進めたいというふうに思います。またよろしく願いいたします。

そのほかございましたらどうぞ。

○竹下委員 はい。

○市長 どうぞ。

○竹下委員 今のコミュニティ・スクールというのが、年々充実してきまして、かなりどこの学校でもそれぞれの地域住民と学校とが一緒になって、その地域の歴史であるとか、またその地域特有の、今だったら盆踊りであるとか、そういう地域を子供たちがよく知って、自分が住んでいる地域に誇りを持つとか、そういうことがどの学校でも一生懸命取り組んでおられると思うのですが、そういったことで、一旦学校であり、就職でありで竹原から出られても、また退職後は竹原で暮らそうとか、本当はもっと早く帰ってきてほしいですけども、そういった形で、竹原にまた戻って暮らそうという気持ちになってほしいという感じで、地域のことをいろいろ熱心に勉強されているところがコミュニティ・スクールなのですけども、それに反して、こういった統合について、私が住んでいる北部の地域は、ほとんど住民の方は何の発表がなくても、いずれ賀茂中に1つになるというのは、大体思っておられるところで、そこまでは思っておられますけど、さらにその先の竹原で一つになるというのは、まだ考えておられないと思います。やはり自分の住んでいる地域の勉強をするのは、こういった各学校では取り組めるけども、これが一つにな

って、例えば賀茂中で、賀茂川ブロックで一つになった場合は、割とこう近くなので、それぞれの地域の勉強というのはするかもしれないですけど、これが先の竹原で一つになって、それぞれの地域のことが子供たち、どうなのかなと、竹原全体の歴史であるとか、そういったものは学べると思うのですが、もっと細かい、自分が住んでいる地域がどうなのかというところまで、今みたいに子供たちが熱心に興味を持ってくれるのかなという心配はあります。

それで、やはり地域住民にすると、学校というのは、すごく町の中心というか、本当交流がある場所なので、それがなくなるというのは、地域住民からすると穴が開く感じがあるかなと思います。

だから、まだ賀茂川ブロックである間はいいいけれど、これが本当に竹原のほうまで行くと、何か竹原の市に学校1つって、そんな市がほかにあるのだろうかと思いますが、今のこの人数から考えると、それも仕方ないなと思うのですが、やはり、何とかそれが食い止められるように、人口が少しでも増えて、もうちょっと竹原で一つになるのは待ったがかけられるような、そういった努力が何とかできればなと思います。ちょっと本当に寂しいことだなと思っております。

○市長 ありがとうございます。

統合であるとか、統廃合ということになると、どうしてもやはりいわゆる集約される側の施設、また拠点と、そうでない拠点とに間違いなくできるわけで、そのいわゆる統合された側の地域または施設については、やはり現状はもちろんそういう実態がある中で、そう決定をするわけですが、やはり心のどこかで、特に卒業生やそこを利用されていた方にとっては、今、竹下委員がおっしゃったように、一抹の寂しさであるとか、そういうことを感じるというのは当然だと思いますし、それは残念でありながら、それが現実ではあると思うんですね。

それで、今まさに10年後と、それから20年後に関わっての答申をいただいた中で、最終的に今年度、計画を策定していくという作業を今、進めているわけですが、やはり10年というのは、もう、本当にすぐそこにある状況ですので、これも放置は間違いなくできないと、子供のために、というふうに考え、それで、今20年先のイメージをお話しになってらっしゃると思うんですが、当然、行政としては、いろんな形でいわゆる改善に向ける努力というものは当然するわけですので、なかなか先行き厳しい状況

にはありますけれども、努力をする中で、まだ現状から行くと、そういうことになるであろうと、あくまでも推計の下に方向性というものは示すわけですので、そこに向けてのご理解というものは、本当に相当ハードルの高いものにはなりますけれども、努力をしていくということが行政の責務であるというふうには認識しております。

いずれにしても、やはり、冒頭申し上げましたけれども、竹原に住む子供たちがいかにいい教育を受けることができるということを最優先に考えながら、物事を決めていくことが大前提ですし、その上で様々な課題でありますとか、思いでありますとかを酌みながら、最終的な結論を出していかなきゃいけないのかなというふうに思っております。

学校教育プラスですね、やはり生涯学びの場というものも市もいろんな形で皆さんにお話もさせますが、そういうことも充実させながら、今、先ほど西川委員がおっしゃったように、忠海の旧東小学校の中では、集学校という民間組織が忠海の歴史も交えながら、いろんな取組をしていただいています。だから、受皿としてこれから先にいろんなことを考えながら、我々大人がいろんな試行錯誤なり、新たな形をつくっていくという努力もしていかなきゃいけないのかなというふうには思いますし、スポーツの世界では、我々が本当に中学生、高校生のときに与えられていた環境と全然違って、もうチームが組めないということになると、大きないわゆるテリトリーの中でその場を求めていくというふうな、現実にはそういう状況になってるということもありますので、大人がそういう環境をどんどんつくっていくということと、子供がそれを選択できるということを提供していく、そういう時代、時代に即した取組をしなきゃいけないのかなというふうに思っているところです。

いずれにしても、課題解決に最大限取り組んでいきたいと思います。

有田さん、いかがでしょうか。

○有田委員 先ほどから皆さん言われていることと同じ意見ではあるのですが、私、吉名なのですが、実は子供を産むために帰ってきてみたら、びっくりしたという。竹原市の人口が減ってたりとか、周りの景色がお年寄りだらけになってるとか、そういうのを感じて、何とかしなくちゃいけないなという考えを持った一人ではあるんですよ。だから、今の活動をしていたりしてるんですけども。

まず、子供が通っている中で、やはり周りの地域の方が見守ってくださってるというのを実感していましたし、今後もそういった地域の方の力がたくさん必要だなというのは思

ったりするわけです。今後、統合されていくに当たり、やはり先ほど竹下委員が言われたように、地域性、その地域しかやっていないこととか、例えば特産品が何とか、吉名とかだったらジャガイモですけど、そういうのをしっかり、竹原で一つになったとしても、その住んでいる町の大切なものをちゃんとしっかり継承できるような取組を今後も必要になってくると思います。

たとえ高齢化でやっていることが衰退していくとしても、今までずっと流れてきた歴史の中で、住んでいる人たちが大切にしてきたものというのは、しっかり残していけるように、住んでいる子供たちが大人になっていくに当たり、その気持ちを持てるように今後もやっていていただけたらなと思っております。以上です。

○市長 ありがとうございます。

まさに有田さん、地域の実践者として、竹下委員さんと同じように、もう地域の重鎮のように活動していらっしゃると思いますので、思いの強さはよくよく認識しておりますので、おっしゃるとおり、地域は地域で語り継いでいくものもたくさんありますし、伝承者としてやはり我々大人がちゃんと役割を果たしていくということは非常に重要でありますので、形としていろんな変化が今から起こってくるとは思いますけれども、その変化に影響されず、頑張る分は頑張らなきゃいけないと思っていますので。ご意見ありがとうございます。

○教育長職務代理者 近い将来ですね、全てが統廃合された場合に、9年間の小中一貫の教育ということになるのですが、今、既に忠海学園とか吉名学園というのは小中一貫でやっております。特に忠海学園は小中一貫になって久しいと思うのですが、そういう小中一貫になった9年間継続して教育が行われたことに対してのメリットであるとか、デメリットであるとか、特にメリットの部分ですね、そういうふうなものを評価はもう既にされていますか。先ほどから地域の人と交流ということになれば、小学校の6年と中学校の3年ということよりも、やっぱり一つのその学園の中でやっていくということは、非常にそういった継承をしていくというのは、よりそっちのほう効率的というかですね、地域にとってもやりやすいというんですかね。関わりやすいという状況になると思うのですが、何かそのあたりの評価というのは、今までされておりますでしょうか。

○市長 事務局のほうで答えられれば。率直な今のイメージでも構いませんので、発言があれば、お願いします。

○参事 はい、ありがとうございます。私、忠海学園の学校運営協議会に毎回参加させていただいております。そういった中で、委員さんの協議、あるいは子供たちの様子の交流等も必ずあります。やはり9年間で、一つの学校で9年間育てること、小学校、中学校、別じゃなくて、やはり小学校から見た中学生、中学生から見た小学生、それが一体に育てられる学校ということで、非常に評価もされていますし、教育委員会から見ても、中学校段階の教員が小学生に関わる、小学校段階の教員がまた中学生にも関わるという大きなメリットが感じられます。そして、何よりもその育ちというのが、それぞれの教員が9年間見据えてこう見えるというところ、これは非常にメリット、小学校、中学校別で育てる以上にメリットがあるかなというふうに感じておるところです。それは恐らく地域の方も感じておられるのではないかなというふうに考えております。

○今榮市長 どうぞ。

○教育長職務代理者 確かに子供たちにとっても、中学生が小学校の1年生を見るとかということになると、その人間形成の上でもやっぱりすごくこう大事なことだろうし、より成長できることだろうと思うのですが、それと、もう一つお聞きしたいのが、こういう評価は多分できてないと思うのですが、例えば学力の問題であるとか、いじめであるとか、不登校であるとか、そういった数はどうなってるかとか、そういう、これもイメージでお話しされるのは大変難しいと思うんですが、できればそういうデータがあれば一番いいんですけども、そのあたりのことも今後ちょっと見て、次の中高一貫ができるまでにある程度評価をしていただけたらいいなと思いますけど。よろしくお願いします。

○市長 はい、どうぞ。

○参事 1つ言えることは、小学校から中学校へ進学する際のいわゆる中1ギャップと言われるもの、これを解消するための大きなメリットがこの小中一貫にあると思います。そ

ういったところで、やはり不登校の未然防止等にもつながっておりますし、学力面から見ても、小学校の学力について中学校教員が理解した上で中学校でどういうふうに対応していくか。

また、小学校の教員から見れば、中学校へ送り出す立場で目の前にいる子供たちにどこまで力をつけていくかというところ、そして中学校の教員へ引き継げるという、そういった意味でも学力、そして生徒指導面でもメリットはあるかなと感じております。

○市長 はい。

○教育指導担当課長 失礼します。今、参事が大的なところをおっしゃったんですけれども、例えば不登校の不登校傾向にある児童・生徒の数というのは、毎月必ず諸課題で出させてはいてですね、1年間でというようなところで把握はしていますので、またそのあたりも、委員がおっしゃったように、少し整理をしながらと思っておりますが、今、イメージではなく、数値で言えるのは、やはり吉名学園、忠海学園の不登校傾向の児童・生徒の数は少ないです。学校規模、母体の数が違うので、全体的なところでしか話はできないですけれども、やはり、今、参事が言ったように、9年間を見通したその連携というようなところが、かなり職員間の中でできますので、傾向があるところに対してこう策を打つか、じゃあ、この子、どうするかという所を、小中の先生たち全員で考えるというところの効果もあるのではないかなというふうに思いますので、そういった数値的なところというようなところは、数としては見えると思いますので、また今後そういった義務教育学校、小中一貫だからこそその効果というようなところが表せるように、私たちも整理をしていこうというふうに思っております。ありがとうございます。

○市長 よろしいでしょうか。

○教育長職務代理者 はい、ありがとうございます。

○市長 さっきもありましたが、いわゆる中1ギャップであるとか、そういうことの解消というか、改善に向けた取組としては、やはり小中一貫というのは、一定の効果があったんじゃないかなと思いますが、いわゆる小中一貫の取組をさらに今回の適正配置で進める

とするならば、そこら辺のところは、教育委員会のほうで今までの実績等をまとめた上で、十分に皆さんに説明していく場面というのは必要なと今、お話を聞きまして改めて思いましたし、実は、教育長から冒頭お話がありましたように、幼・保・小に関しても、やはりしっかり小学校につないでいくという取組の中で、今、力を入れて竹原市の中でも進めております。いずれにしても、段階、段階で大きなトラブルといいますか、ことにつながらないような取組というものをきめ細かく今、進めているのが現状であるというふうに思いますので、さらにブラッシュアップができると思っております。

一通りご意見いただきましたし、この後、教育委員会議も予定されているということでありますので、何かそのほかありましたら、ご発言いただければと思います。

よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

それでは、すみません、長時間にわたりましてご意見を賜りまして、ありがとうございます。いずれにしましても、今日、そうか、もう一点あるんですね。すみません、協議事項としては、今の適正配置に係る件ということですが、これは、私が終了した後でいいのかな。報告は。

○事務局 引き続きこのまま、なければ、引き続いてお願いします。

○市長 引き続きでいいですか。はい、じゃあ、すみません、その他事項で、もう、皆さん承知のとおりですが、海外派遣研修、本当に無事に帰ってきてくれました。本当にうれしく思っております。その報告を大橋さんのほうからお願いできますか。

○教育指導担当課長 それでは、失礼します。報告というところで、現状のこの竹原市海外派遣研修について、少しお話をさせていただこうと思います。よろしくお願いします。

まず初めに、この海外渡航といいましても、渡航するにはかなりいろいろなハードルがありまして、そこを本当今榮市長はじめ、たくさんの方々の支えや支援をいただきまして、今回の渡航が完了したのではないかなというふうに思っております。まだこの事業は半ば、これからというところもあるんですけれど、まずもって子供たちが安全に、無事に大きな宝物をいっぱい持って帰ってこられた、その経験をさせていただいたということに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

それでは、この海外派遣研修について、少し説明をさせていただきます。

この海外派遣研修事業がどういうフレームの中で実現したかというところの大きな概要のところから説明をさせていただきます。

このように、T a k a h a r a G l o b a l G a t e w a y ということで、通称TGGということの、未来の人材育成推進事業というものを令和2年度に新たに立ち上げましてスタートしたこの事業であります。大きくはこのような流れになっております。

まず、趣旨、事業趣旨のところは、教育大綱、あるいは竹原市の教育計画の中にも入っております。今後さらなるグローバル化の進展が予想される中、竹原市の次代を担う青少年が外国語によるコミュニケーション能力を高めたり、異文化、自分が理解を深めたりすることで世界とつながり、ふるさと竹原を広く発信できる人材を育成するということ、ここが大きな趣旨であります。

先ほどから今後の子供たち、未来を担う子供たち、竹原の子供たちにどんな力をつけていくかという話を適正配置の中で出ておりましたが、私の中では、今回の事業の子供たちの様子とかなりリンクをするところがありまして、こういった趣旨の下にいろいろな事業を設計していくことの大切さということを改めて今感じております。

その下にありますように、日常的に英語を活用する整備であったりとか、あとは書籍というようなところも令和2年度から粛々と進めております。要するに子供たちが身の回りにずっと外国語の教材があったりとか、異文化のことが感じられるようなことを小学校のところから設置をしておりまして、ここは整備をしております。

そして、真ん中を見ていただければと思うのですが、ここが1DAY国内留学ということで、中学生と小学生、それぞれ1と2を設定しておりまして、広島大学の留学生を中心に、海外の方と直接触れ合うような機会も設定しております。

また、併せて、その横の海外交流というところで、これが今回行かせていただいた1週間の海外交流、派遣事業であります。そして、そういうことを総括しながら、一番右側、矢印が一番右に向いていると思います。これは、先ほどの狙いにありますように、行った子だけ、あるいは1DAYに参加した子だけではなくて、市内の全ての子供たちがやはり英語を使って自分の考えを発信していく。つまり、将来グローバル化の中で物おじすることなく、しっかりと自分が表現できる、自分の考えを相手に伝えることができるという力につなげていくということで、ここは主に中学生ですが、ディベート大会というところで、今回の力をしっかり生かすというようなことも予定しております。

実は今日、決まったのですが、第1回のディベート大会が10月15日の土曜日に行われます。これもコロナ禍の中、肅々と英語部会が理論研から何からずっとやってきて、今年度新たにディベート大会を行うというようなこともありますので、海外研修に行った生徒はもとより、そういったところを聞きながら、中学生が自分の考えをディベートとして乗せていくというようなことも10月には行われようとしております。

こういった大きいフレームの中で行っているこの海外交流のところ、ここを少しお話をさせていただきます。

まず、5月の段階で募りまして、今年は16名のエントリーがありました。本当は16人全部を連れていきたい、意欲のある生徒たちだったのですが、8名に絞りまして、よし、行くぞというふうに決めました。今回は、8名と、令和2年度に行く予定だった高校生6名、合わせて14名が海外派遣に参加をします。ということなので、事前研を3回行いました。ここにありますように、6月、7月。実はこの渡航前の8月のぎりぎりにも1回やりましたので、全部で4回、あるいは5回の事前研修を行っております。エントリーをしてきて、自分で行きたいと言った生徒ですので、語学力、要するに英語力はかなりあります。市内の子供たちの中でもかなりある子たちですけれども、実際にK&Fの英会話教室の講師を頼んで、例えばコミュニケーションするとかいうようなところになると、やはり引いてしまう。自信がないというところで、かなり不安は最初あったのですが、回を重ねるごとに非常に自信も持ちながら、7月31日には壮行会も一緒にさせていただいて、保護者、そして今榮市長にも来ていただきながら、激励の言葉を受けて、自信を持って渡航に向かうことができました。

これが事前研修のときの生徒の様子です。ここにありますように、要するに、初めて会う子です。市内の8名なので、友達ではなくて、会って初めてこんにちはというような子供たちだったんですけれども、その子たち14名がハワイに行くということなので、まずはこの14人の力を結集しようということで、いろいろ話をしながら、協調性というようなところも目指して研修をやっていきました。

下の写真は、実際に向こうの学校に行った生徒たちと交流するときに、竹原のよさをプレゼンしようというところで、本人たちが全て考えました。何をPRするかというのを考えて、それを英語に直して伝えていく。それをK&Fの講師が、それじゃ伝わらないということで直しをして、さらにブラッシュアップしていくというような作業をずっと行っていきました。

これは、生徒が書いた振り返りです。まだこれ、渡航はしてないところなんですけれども、上の子なんですけれども、英語は間違えてしまっても、伝える、相手に伝えようとするということをポイントにして、自信を持ってハワイの中学生にプレゼンテーションをしようと思う。これ、最後ぐらいにやっと分かってきたんですが、英語力だけではなくて、相手意識を持って竹原のよさを伝えていくんだという気持ち、相手を見て、そしたら何とでも伝わるんじゃないかということキャッチした生徒でした。

その下です。これ、実は中2の子がいます。今回エントリーした中の一番下の子が中学校2年生なんですけど、不安なことはたくさんあるけど、今日も高校生や先輩たちに助けてもらったり、支えてもらったりしたので、協力できるように責任を持って行動したいですということを言っておりました。一番年下ということで不安もあったとは思いますが、こういった事前研修を積み重ねる中で、いろいろなことを感じながら、気持ちをどんどんどんどん高めていって、当日を迎えたということです。

それでは、出発というところで、8月18日から24日、5泊7日になります。日付をまたぐので、向こうに宿泊したのは5泊ですが、カウントとしては1週間、子供たちはハワイのほうに行きました。

この表、ごめんなさい。見にくいのですが、この今回の海外渡航の派遣の中で大きく2つの山場があります。1つ目は、ホームステイです。これは、14人の生徒を2人組のグループに分けて、2人で1家族のホストのところに行くというようなことでチーム分けをして行いました。事前にどういう家族構成かというようなところ、ペットは何かいるかとかというような事前情報はありましたが、ほぼほぼ行ってからじゃないと分からないというような状況の中で子供たちはホームステイに行きましたので、ここで恐らくいろいろな経験や体験や心が動くことがあったんじゃないかなと思います。

もう一つが学校訪問です。今回の海外派遣の大きな狙いは、先ほど言いましたように、子供たちにしっかりとコミュニケーション能力をつけて、異文化であったり、それを基に自分が理解に落とし込むというところが目的だったのですが、もう一つは、姉妹校締結、つまり、竹原の中学校とハワイの中学校が締結を結ぶことによって、日常的に交流ができるというようなことにつなげていきたいと思っておりましたので、このハワイのホノウリウリ中学校というところに生徒が行って、そこで校長、会長の代表さんと、向こうの校長先生との締結というようなことも行いましたので、大きくはこの2つの山がありました。

まず、ホームステイです。不安なことは何かねって私、投げかけたんですが、ほぼほぼ

この1週間の体験の中で、不安なことはホームステイですと子供たちは言いました。どこが不安と言ったら、中学生なんかは、例えば、食べたくないものがテーブルに置かれた場合は、手をつけていいのって。でも、私、それ食べれないときはどうしたらいいという現実的なところの問題です。ノーサンキューって勇気を持って言ったらいいよというような話なんですけど、そういったちょっとしたことが気になったりというようなことがありました。ただ、その写真を見ていただいたら分かるのですが、一番左の下の子なんですけれども、ウェルカムで来てくれちゃって、おお、待ってたよということで、この2人の女の子も、1人、違う学校同士の子供なんですけれども、生徒なんですけれども、非常に不安を持って臨んではいたんですが、このホストを見た瞬間から、この笑顔になって、2泊3日をいろいろなところの体験に連れていっていただいていたようです。ほかのグループも、これ、写っているのはホストファミリーの家族だったり、ホストファミリーのところのいとこだったりというのが、今回のホームステイのときに来てくださったようで、いろいろこう話をしたり、いろんなところに連れていっていただいたりというようなことをしていたようです。

いろんな不安はあったんですけども、私も教育長も感じたんですが、送り出して、帰ってくる間、2泊3日あったんですが、表情が全く変わって帰ってきました。少し不安があったりとか、まだまだ硬かった子供たちが自信を持って、要するにこやか、少し余裕を持って帰ってきたということが一つ大きな、子供たちの表情から分かった成果でありました。非常に中身の濃いホームステイになったんじゃないかなと思います。

そして、これが2つ目の売りでありますウリウリ中学校での姉妹校締結の様子です。ちょっと学校全部を撮った写真が見つからなかったのですが、かなり大きい学校で、800人でしたかね。700人。全校生徒が700、800ぐらいの学校で、こういうように自分たちのTシャツをつくっておりまして、竹原の子に持って行って、青いTシャツを生徒や引率者にもいただきまして、すごく結束感のある中学校でした。

左下にありますように、これ、高校生です。今、武田に行っている高校生なんですけど、この子がIDをつくってもらって、うれしそうにかけてしています。やっぱりセキュリティが厳しくて、誰でも入れるということではないので、行った引率者も含めて全員このIDカードをつくってくれちゃって、それで校内を回ることでした。

学校の中での様子も、子供たちは1人につき1人のペアさんをつくってもらっていて、おお、ウェルカムみたいな感じで、2人でいろいろこう回らせてもらったので、こういう

授業も向こうの生徒と一緒に観察をしたりとか、実際に授業に入ったりということもしておりました。一緒だなと思ったのは、左の上のところはプレゼンの授業でした。日本と一緒に、さっきの事前研の様子と重なるんじゃないかと思うんですが、同じようにプレゼンの練習をしたりという授業も、生徒たちも見て、一緒だねというようなところも感じたというところです。

そして、いよいよ練習の成果を出すプレゼン発表です。こういった形で3チームに分けて、竹原の食べ物、祭り、そして観光地というこの3つのグループに分かれて14人がプレゼンを行いました。右下の写真なんかは、実際に自分でスライドを、ポスターなどをつくって、機械は使わなかったんですが、それを基に英語でしゃべって、後から質疑応答というようなこともして、充実したプレゼンを行うことができました。

そして、アロハの教育長がおられますが、今回は校長会の代表として亀井校長先生が行ってくださいましたので、竹原のほうは亀井校長、そしてハワイのホノウリウリ中学校は、校長先生である●フジモリ●校長先生がこのように調印をされまして、正式に締結ということになりました。

右上の写真の向こうにおられるのが●タジマ●教育長といって、この地区の教育長になります。日系の2世、3世の方です。ということで、子供たちに見守られながら締結を行いました。そして、こういったウェルカムのものも全部自分たちでつくってくださって、子供たちも一緒に最後は写真を撮ってお別れをしたということです。

ちょっと簡単ではあったんですが、ホームステイ、あるいは学校訪問の様子をお知らせさせていただきました。

このほかに、ここにありますように、実は今回の渡航に関して、観光というような目的ではなくて、そこに行くためにどんな力をつけるかというところをコーディネーターとしてしっかり話をしていたので、そこにありますように、現地の生徒との交流、これはダイヤモンドヘッドに登ったんですが、そのときに、亀井校長先生が元ALTとずっとつながっておられたという縁もあって、その元ALTで日本におっちゃった方のご家族だったり、いとかだったりという子供たちが来てくれて、5人ぐらい来てくれて、一緒にダイヤモンドヘッドに登りました。そこで一緒に登りながらゲームをしたりとか、話をしたり、歌を歌ってくれたりとかいうようなことで触れ合いを行いました。

また、右側は、パールハーバーに行ったんですけれども、社会科の授業の中では、ここ、子供たちも分かってはいましたが、逆に今度ハワイの視点からどうだろうかというよ

うなところで、非常にガイドさんの話も真剣に聞いて、時差がすごい、時差ぼけが多分大変だった1日目だったんですが、暑い中、しっかりと子供たち、学習をしてくれました。

そして、日本文化センター、このハワイに移民が多いのは何でかなというようなところを、施設を基に歴史を振り返りながら教えていただいたというところです。

そして、左下に日本人留学生との交流とあったのですが、昨年度は渡航ができなかったもので、オンラインでつながりました、ハワイと。そのオンラインのときに出てくれちゃった学生が、今回竹原から来るよということで、すぐに駆けつけてくださった、●ユユコ●さんというんですが、写真の中にいるんですけども、この子が来てくれて、一緒に御飯を食べました。そういったところの、去年のオンライン学習があったからこそ、子供たちも、ああ、オンラインに出て●ユユコ●さんだみたいな感じで話をして盛り上がっております。

それで、一番右側なんですけど、ハワイ大学の学生とも交流をして、ここでは一つチャレンジだったんですが、市バスに乗ってみようということで、ハワイ大学の学生さんとこの子供たちだけで、自分でお金を払うんだよということで、市バスに乗ったりという体験もさせていただきましたので、こういったように、行って終わり、楽しかったねではなくて、そこから何を学ばせるかというようなところも、しっかり仕組んでいった研修になったかなというふうに思います。

今後に向けてというところなんですけど、まだまだ、私も今、報告とはいえ、現状のところをお伝えするだけではあるんですが、ここからが本番かなと思っています。行って帰った子供たちが、今度17日に振り返りとまとめの発表を行っていきます。そして、10月では、今のところタネットで研修の報告を行うことと、各校にいますので、各学校で報告会を開催するというところで、今、予定をしているところです。

先ほど冒頭申し上げましたように、この海外派遣研修が一発花火ということで終わるのではなくて、ここから得たことをしっかりと、先ほどありましたように、人材育成に市内の子供たち、学力にももちろんなんですけど、つなげるように、この事業をやっていききたいなというふうに思っております。まず第一歩というところで報告をさせていただこうと思います。

最後ですね、スライドはここまでなんですけど、今回、私がすごくこの経験はこの子供たちに生きるなと思ったのが、PCR検査をして、陰性じゃないと出国できないという大変苛酷な旅行だったんです。教育長はじめ、引率者もドキドキしながらPCRを受けたのです

が、そういった中で、全てスマホです。要するに、税関を通る、あるいは陰性証明を見せるというようなところは、個人が端末を持って、ここが青にならないと入れないとか、陰性証明を自分で入力して、ここに登録をしないと空港で見せれないとかいうような、ある意味、今だからこそその体験というようなところも子供たちは体験をすることができたので、まあ、こういったところも全部やらせました。ちょっとやっつけてごらんといって、自分たで全部をやらせたので、そういう意味では、コミュニケーション能力であったり、本来の目的以外の、今だからこそその体験も生徒たちはしたのではないかなというふうに思っております。また、事後の振り返りであったりとかということも含めて、最終的な今年度のご報告もさせていただこうというふうに思っております。お時間をいただいてありがとうございました。以上で終わります。

○市長 はい、ありがとうございました。

本当に、ここに書いてあるとおり、竹原市の次代を担う青少年とありますが、本当に担ってくれるのは彼らだと思いますので、これに続く人材を送り出し育てる努力はこれからもしてかなきゃいけないし、この事業は今年だけの事業ではなくて、継続していくというふうに思っております。大橋さんの話がありましたように、行った子供たちだけの取組だったら、私も実は首を縦には振らなかったと思いますけれども、これをやっぱり展開をしていくという大きな目的があるからこそ、この事業に大きく私も後ろ盾にならせていただきました。ぜひこれをきっかけにどんどん活躍できる子供たちを育ててもらいたいなというふうに強く思ったところです。

先ほどのスマホの話を大橋さんが話ししてましたけれども、きっと彼らに教えてもらうようにすぐなりますので、今回は指示をしたかも分かりませんが、子供たちってそういうものだというふうに思います。

はい、ありがとうございました。先ほども少しお話ししましたけれども、これから教育委員会もあるというようなことですので、一旦今日の総合教育会議はこれで閉じようと思います。よろしいでしょうか。

教育長、何かありますか。よろしいですか。

副市長、何かありますか。よろしいですか。

じゃあ、長時間ありがとうございました。引き続き竹原市の教育行政について、一緒になって委員さんと教育委員会と進めてまいりたいと思いますので、引き続きよろしくお願

いします。本日はどうもありがとうございました。